明治三十年十一月十八日印刷
明治三十年十一月二十日發行

婦人衛生雜誌

第九拾六號

私立大日本婦人衛生會

大日本婦人衛生雜誌
第九拾六號
目次

大日本婦人衛生雜誌
第九拾五號
目次

婦人衛生雜誌第九拾六號（明治三十年十一月二十日發行）

講演

●赤痢病豫防に就て（十月例會講演）

醫學士　山根正次君演說

皆様に申上げまするが、此大日本婦人衛生會は明治二十年の比に生れ出でまして、既往十年間續いて居ります。而して是迄でも種々有益な御話が有りましたが、會員外の人は聽くことが出來ませなんだ、其會員外の人としては偶々會員の紹介、若くは誘引したものだけで有りましたる處二週間ばかり前に至りて凡そ一家の衛生に與かる婦人方をして此話を聽かしめたならば大に益することで有らうと云ふことで、私立大日本婦人衛生會は今回より傍聽隨意と云ふに御協議が整つたと云ふ話でございます。私は常に警視廳に在つて、衛生上の事に關係をして居るものでありますより至極結構なことゝ御賛成を申しました、ソレ故に此會の爲めには出來るだけ御盡力をしたい心で御座います

然るに今日は意外に澤山の御集りで賛成致しましたる目的を遂して誠に喜ばしく存じます、猶ほ是れより婦人衛生會は、毎月例會を各區に開きて廣く區内の御婦人方が衛生上の演說を聽くことになり從つて規則が御手許に渡りました質に此會へは誰方でも御入會が出來るのみならず僅かの費用を以て有益なる雜誌を毎月配布致しますことに決して居りますから私は會員外ながら折節御饒舌した事を時々に右の雜誌に載することに盡力致しま

す。畏れ多くも此會の總裁は小松宮御息所殿下に渡らせられ會長は仁禮夫人にして其他歴々の夫人方が幹事をなすつて居らせらるゝこと故、追々盛大になることは請合で御座いますから、何うか貴女方は御家に御歸りになりまして、御父樣や御母樣に御相談を成され幸に御賛成を得ましたならば御入會をなさるゝことを願ひたい、なほ御友達へも御勸めを願ひたいと思ひます。

偖私の今日御話致さうと思ひまするは目下流行致し居る赤痢病の豫防に就ての事で有りまする、一体私は早くから參つて前座を勤むる筈の處、貧乏籤を引いて、三浦博士幷に宮本君より善い御話の有つた後に廻はりました、而して私の御話が大分に長くなるかも解りませぬけれども皆樣は四時に御歸りにならなければならぬことゝ承つて居るから成る丈け急いで御話をしまする間、何うか話の終へるまで御歸りにならない樣に御辛抱を願ひたいので有りまする。

ソレで私は第一番に人の貴び重んずべきは何なるかに就て順次談話を繼續する積で有ります、實に人の最も大切にすべき者は何かと云ふに、私は身体の健康と云ふより外無いと思ひます、健康なる身体が有つて後君に忠、親に孝を盡すことが出來國家の爲めに働くことも出來るので有ります。健康でなければ其目的を達することは出來ませぬけれども人は二豎の容器で有りまするから、我々の健康を害せよふと致しまする敵が絶へず我々の身邊を窺ふて居ります其敵は何かと問へば疾病其ものので有りまする。若し不幸にも此敵に侵されますると熱が出る或は咳が出る或は頭が痛むとか種々

赤痢病豫防に就て

の難儀が湧て來まする、併ながら私は通常の病氣はまだ左程恐ろしく思ひません獨り多數の病氣中法律に定めある八種の傳染病即ち實扶垤里亞、猩紅熱、パスト、赤痢、虎列剌、腸窒扶斯、發疹、窒扶斯、天然痘、等の病氣を最も恐れまする何故に此等の病氣が恐いかと云に人より人に傳つて終に一番我々の貴重すべき數多の人の生命を忽に奪ひ去りますからで有まする此外に肺結核の如き黴毒の如き徐々的に國を亡ぼす病氣もあるが、一時に蔓延して一時に人の生命財產を奪うものは前の八傳染病の如きものはありませぬ今日是れより御話せんと思ひまする處の赤痢病の如きは取り分け恐ろしきものと思ひます。何故かと云ふに此病は虎列剌などゝ違つて永く人を苦しむるので有りまするからである虎列剌は生死孰れか大抵二三日で片附きまするに拘はらず赤痢は爾うは參りませず久く日限がかゝりて其間折々激しき腹痛を起し便意を催し愈々苦みが長かびきて容易に癒りませぬ、而して治療其當を得んときは死んで了ひます。其死亡の比例は治療の屆くと屆かざるとに大關係を有しまするが、大抵百人の患者に就て五十人、若くは三十人乃至二十人位の數で有りまする、目下全國赤痢患者の數は宮本君が既に申されましたから再び申す必要は無いが、何處に最も多いかと云ふに縣にあツては山梨縣にして該縣に於ける本年赤痢患者の總數は既に八千五百四十九人に達し其中死亡千六百七十九人で有りまする第二の流行地はといへば輦轂の下たる此東京市である、私は毎も此事を謂ふに際して覺へず涙を催しまする。何せなれば財產所有者が多いとか學校の成績が好いとか家

屋を澤山持ッて居るとかの第二位に在るのならば固より喜ぶべきで有りまするが、甚だ忌むべき疫病流行地の第二位に數へられて居りまするのは遺憾千万でありまするからで御座りますソレで東京本年の赤痢患者は如何程在るかと云ふに六千四百七十三人と今日の官報に出て居ります、其中死亡者が千七百五十一人あります總患者は山梨縣の方が二千以上多いが、死亡數は反ッて東京の方が多い何故死亡者の多いかと云ふに就ては後から御話を致します。

第一……赤痢の恐るべき所以は、先刻宮本君が「赤痢は邦を滅す云々」と謂はれましたから、最早足りて居りますが、私は些か重復に渡るをも顧ず、猶は其國を滅す所以を御聽きに入れましよふと存じます實に赤痢は最貴重の生命を奪ひ去るのみならず、未來の國民の敎育を妨げます輙ち南多摩西多摩郡の或る村落は皆此赤痢病の猖獗なる爲め學校の授業を休んで居ります、世田ヶ谷村の近傍に赤痢のある爲め學校へ通ふもの一人も有りませぬ。又經濟上から申しても病人が一人出來ますると醫師に懸つて啻に診察料藥代を拂ふのみならず先刻も御話のありし如く傳染病には消毒が肝要でありますから、石灰石炭酸等を以て糞便を消毒しなければならむ譯で、遂に澤山の御金が要りまする。一人に於てすらその如くであるから、多くの病人が出來れば其費用は莫大のもので有りまする、且つ町村に於ては之れが爲め豫防の方法を講じなければならす府縣は撿疫部を開き撿疫委員を設け政府は撿疫事務官を置いて、諸方に派出させるやうになッて參りまする尙は一町村に關係する

例を言へば、繁華なる市街も自ら寂しくなります私は「講釈師見て來たやうな嘘を言ふ」でなく實踐致しましたる彼の青梅町（青梅には赤痢はないが周圍の村に於て流行する爲めに）に就て例證を示し申さん丁度私は市の立つ日に行き合はせましたが、毎も青梅町の市日は凡て二万反位の織物が賣れる、東京其地の地方より澤山の人が寄りまするから反物の賣れるはかりでなく、飲食店なども繁昌して種々雜多の金が落ちる處なるに拘はらず此日寂として聲なく實に哀れの狀態でありました、又八王子町も同樣なる有樣でありました。本年最甚だしい慘狀を現したるは南多摩郡堺村の小山である此小山は今年赤痢患者の初發處でありまして其初め一病人が隱れて居ッた爲めに續々病人が出來て而して二百三十戸中一戸を殘して悉く此病に罹らざる家のない處でありました、私は未だソレ程蔓延せざりしときに往ッて視て「今日嚴重に豫防をしなければ竟に非常の事に至ッて畑の物を植えることも、草を刈ることも出來ない蠶も棄てなければならむやうなことに至るから今の中多少の金を出して豫防を遣つたら宜からうと、言つて戻りました、其後一月計り程經て往つて視たるときは、皆病人は悉く村の學校に收容して、其費用に六千圓醵出した、而して畑中を見れば粟より草が高く延び桑葉は青々と茂れるも蠶を飼ふでなく絲取る娘も機織る嫁も無く一村荒れ果て、處々に念佛の鐸を聞くのみにして實に無常千萬の光景で有りまする。其他經濟上に及ぼす影響は若し工場に二三の病人が出來れば直ちに工事を休まなければならむ。又農事を爲す處で赤痢

が流行すれば病人は假令快復した處が病み疲れて蹌々と致しまする農事に當たることは出來ないので有りますから間接に大損害を來しまする斯う云ふ事が幾度も出來ると、竟に國の衰弱を來すので有ります。

第二……右の外に權利を失ひます、其に何う云ふことかといひますれば、先づ日本に痘瘡虎列剌赤痢病等が流行致しますれば我邦の船舶が外國に往くと、船舶撿査に逢ふて、遠き沖に船を繫いで、其船より病氣が發生するか、せざるかを五七日間確める、然る後でなければ船の貨物を陸に揚げることも、船中の人が上陸することも出來ませぬ、今年は彼の小さき布哇國すら、日本に向ッて船舶撿疫を致して居りまする。ソレ故貿易上に影響を及ぼすことは實に非常で有ります。ソレのみならず日本には毎年夏季の候に際して香港上海邊から多くの外國人が來遊するのであるに、本年は日本には赤痢があると云ふので、例年に比して少ないのは誠に殘念で有りまする。

第三……是より疫病の軍事に及ぼす關係を御話し致さん皆様も御存知の通り我國では今後益々軍事が擴張せられますることと故、衛生の道を愈々進めて好い兵士を出さなければならない、然るに日本兵士に就て明治十五年比の兵と此比の兵とを比較して某將軍の歎かれた事が都新聞に記載して居ります。ソレは、前年の兵と今年の兵とを比較すると、概して二百五十匁目程体量が減じて居るとの一事でありますと左もありなん浩歎に堪へんことである。ソレで將來人の母となるべき處の皆様方の身体が健全ならざれば、健康なる子を生むことは

出來ない、戰勝後の今日以來軍備を擴張せられて從來六師團であつたものが、十二師團になつたに就ては、ソレだけ澤山の兵を要しまするも。人民が健强でなければソレを滿たすことは出來ない倘は且つ此比の樣に續々流行病が出ますると、日本國民の身体が漸々に弱くなつて、遂に丈夫の人間を見ることが出來ざるやも測り難しと思ひます若し矮小な人間が鐵砲を擔ぐとか、弱い人間が戰爭に出掛けるかと云ふやうな事になりますれは勝敗の數甚だ氣遣はしく存じますされば傳染病に未來の國民の敎育を妨碍し、經濟を紊亂し、國民の身体を永遠に損ひます、實に其害と云ふものは洪水戰爭より甚だしい。去る十月二日の都新聞に二十七八年の戰役幷に台灣に於ける戰死者と病死者との比較が出て居ります、輙ち死亡者總數が一万〇五百四十七人にして、此時に於て畏れ多くも有栖川宮北白川宮兩殿下にも薨去あらせられました、此死亡數の中戰死は實に僅かのもので有ります、輙ち戰死者十百廿五人、負傷して後死亡せしものが二百九十一人、然るに病氣死亡は實に八千九百九十七人であります、其病氣は主に虎列剌赤痢腸窒扶斯である、ソレ故に私は砲丸よりも劒戟よりも傳染病の方が恐いと申したのであります。戰爭をすると、一時國家が非常に疲弊するもので有りますが、若も勝ツたるときには澤山の償金を取るのみならす、土地まで分與して貰ふのである之に反して若も病氣が年々歲々日本の地を離れませぬと、國家の衰弱は容易に挽回することは出來ませぬ。斯くの如く傳染病の流行は人生に取ツて最恐るべきで有ります、ソレで此赤痢病流行の

時期に就ては、既に晝熱夜冷の時と宮本君から御話になりましたが、私は是れから追日小春の時期になッて、市中に於てよく柿の實の賣れる比はひは赤痢病は猶ほ嚴重に豫防をしなければならないと思ひます、腸胃の弱い人は別して飲食物に氣を附をつけなければなりませぬ。其御注意に就ては何ほ申したき旨も有りますが、今日はソレを措きまして、何が最も傳染病をして益々增多せしむるかと云ふ其原因を詳しく申します。

(第二)隱蔽の弊害　是れは實に恐るべきことで す、今年も其初め此病氣を隱匿して病毒を傳へた例が有る。南多摩郡由井村の例を御話致さん、由井村の近處に元八王子と云ふ村が在る、而して元八王子から或家の雇人が由井の方に歸ッて來まして下痢するけれども醫師にも懸りませぬ、併しながら頻に人の評判する處から、或時巡査が見廻りしが其家の主人が病氣で居つた、ソコで巡査は「御前は腹がくだると云ふ評判だが何うか、若し惡るければ早く醫師に懸ッたら宜からう」と忠告をすると、「否腹はくたりませぬ、もう大へんに宜いと言ッたが猶怪しき處があるので、再巡査は醫師を連れて往ッて診察させしに正眞の赤痢で有ります、然るに此家の下位に一の井戸が有りしが連日の降雨で、右の赤痢病者の汚物が自然此井中に流れ込みしを近處の人々が知らずに不幸にも常の如く用ひて居りし爲め初發の赤痢病者が露見せらるゝと同時に諸所に病人が出來ました且ッ此由井村から元八王子に雇人が戻ッて來た爲め元八王子にも同病を發することになりました右の如く一軒隱蔽せしより遂に三百餘の病人が出來ましたなんと

隱蔽の弊ほど甚だしきはないと思ひなされませぬか私は實に病氣を隱蔽する奴は、强盜より惡くいと思ひます、何故なれば强盜は刄を拔いて人を脅して金を請求する此時金さへ出せば逃げて往き、決して人の生命まで奪はうとは致さぬ。爾く病氣隱蔽は、ソレが爲めに多くの人を殺す、左すれば其罪は遙かに强盜より重い譯けであります、けれども法律では罪が輕くなッて居る、私は隱蔽者の罪は强盜より上に刑したが宜いかと思いますが、日本では未ださほどに徳義は腐れて居らんから爾う云ふ不心得なる隱蔽者が多く有らうとも思はれない。尙は隱蔽の爲めに蔓延を來たしたる例を御話致さん、去る明治十九年、本所區の材木商西村市郎なるものが虎列剌で死にました、其時は通例の病死届になッて居ッた、故に一向平氣に多勢の人が集ッていろ〳〵の手傳をなし飮み食ひをして、葬送を濟して了ひました、然るに其後近傍に虎列剌患者が澤山出來ました、其患者は皆右の葬式に係ッた連中であるこれは、初め西村市郎なるものが虎列剌で死にしを醫師と言ひ合はせて隱して居ッた所爲にして明治十九年の虎列剌日記に詳しく載ッて居りまする、實に隱蔽の弊程恐るべきものはない、而して隱蔽したるが爲め何うして傳染するかと云ふに、前に逃べたる例の如く、汚物を投じたる河水或は不潔物の洗濯汁を流したる井水等を使用せしより或は親戚の者が見舞に往來し病人の便器汚物等に止ッた蠅が來て汚したる茶碗或は菓子を知らずして飮食せしより自分若くは家族の中に斯る恐しき疫病を發するのでありまする全体蠅と云ふものは實に危險なるものにて假令茶

赤痢病豫防に就て

は喫まずに歸ッた處が糞便に止ッた蠅が若しも身体衣類に止ッて一所に其家に入る時は其足に着けたる「バチルス」を御土産として室内の器物茶碗の上に置きて去ります故に病毒の有る家の蠅が着いて來た以上は、自分は罹らんでも他の者を侵することが有ります。實に此病氣は必ず前に病毒が無ければ發せんのであッて、蠅は其病毒の傳染を媒介する者の一で有ります。三多摩郡村落の住民は今年の赤痢は親類を歩くと申して居りまするが其所謂を聞けは親類の者が病氣見舞に來て病毒を貰ッて往くと云ふ事に歸します想に田舍に於ける赤痢病の蔓延は主に蠅から傳ッたと云ッても宜しからんか

前に申しましたるは通常人の隱蔽なので有りますが、醫師が隱蔽することに就て申述べん今日の法律は傳染病に罹るときは一般の人が屆けなければならむのでありますが、以前は係り合ひの醫師が屆ける規則でありました。然るに醫師自らが「あなたの處の病人はまだ赤痢にはなりますまい」と云ふやうなことを言ッて、屆けを怠ッた爲めに多くの病人を出したことも有りまする、或は又病人より「何うも避病院に送られては困りますから、此度は御猶豫を下さい」と賴むと「宜しう御坐います」と請合ッて、診斷が定まらむとか何とか言ッて曖昧模稜の中に屆を懈り從て消毒も充分に行屆かぬと云ふ處から蔓延せしめたる例が澤山在りまする。

（第二）傳染病の增多を促す者吾人が今年實驗して居るのは特に迷信と云ふ事で有りまする、私は先頃本會に於ても迷信と云ふことの衞生上に害ある所

以を說きましたが、則ち其迷信と云ふ事は妄りに神佛に祈念して、呪咀祈禱を恃む事で有ります、是れが大に病氣の蔓延を助けて居ります、便ち門戶に御札を張ると病氣が襲來せぬとか云ふ妄說を信じて、家の門戶に「鎮西八郎爲朝の御宿」或は「井上角五郎御宿」と書いた札を張り、若くは「蟹の甲」「鬼の面」などを貼り付けて最早病氣は來ぬものと安心をして居る、明治の聖代には斯う云ふ馬鹿者は無からうと思ひましたに、帝都第一の中央にさへ隨分爾う云ふ阿呆者を見受けますのは實に慨歎の次第で有ります。私は是等の迷信を打破りたく欲しますから、今天理敎會の失策談を御話を致します。九州の長崎に於きまして明治十八、九年の比虎列剌の流行したる際に、天理敎會なる者が這入ッて來て、天理敎會を信ずれば虎列剌にならんと云ふことを說きまして、大勢の人を集めて、夜は踏舞をなして神祭をする、或時神前の瓶子に榊が挿してある、而して講師なるものの曰く「今我等は諸君方の虎列剌に罹らざるやう神に祈りました、就ては此願意が神に通じたならば、此壜に御神酒を注ぐと、挿したる榊が動き出します」と言ふ故、人は皆奇異の思ひをして見て居ッた、やがて彼は神酒を取ッて、漸く注ぎ入れますと、豈計らんや榊は稍動き出した、遂にあまり動き出した處から榊は平均を失ッて、一方に傾くと同時に壜は倒れて中から泥鰌がニヨロ〳〵と這ひ出した、ソレで泥鰌に酒を注いだから、榊が動き出でたのであると云ふ事が發露したと云ふ話が有りますが、概ね世の中の奇異なる事と云ふものは爾う云ふ樣な手段で人を瞞着するので有ります。

赤痢病豫防に就て

或は成田の先達、富士講の先達とか云ふ種類の者は香を澤山焚いて、其中に年齢と姓名とを書いた紙を投して燃して其煙が上に登ると病氣が癒るとか、横に靡くと癒らんとか云ふことを信じて居るものが往々在ります。然して斯う云ふ輩の多く住んで居る土地では必ず病氣が蔓延する、其例は丁度今日の東京日々新聞の記事にあります乃ち「靜岡縣に於ける赤痢は各地個々に發生する患者極めて稀に其多くは家族傳染にして患者の三分の一は實に此家族傳染に因りて發生したるものと云ふべし今其理由なりと云ふを聞くに、患者の隱蔽豫防消毒の不行屆及自宅治療は勿論病毒の蔓延を助長せしめたるか相違なしと雖も神佛祈禱等の妄信は實に之が病毒浸潤の主因たるべし」と云ふことが書いてあります、加持や祈禱をした爲めに、或は賣藥を恃みたるに因ると云ふのであります、如何にも靜岡縣は加持や祈禱をして安心をした爲めに疫病が蔓延ッて居る。靜岡縣のみならず概ね田舍に往ッて見ると、加持祈禱に依賴して安心をして居る處が尠からんであります或る處には繩を張ッてソレに大きな幣を懸け、或は泥塗れなる馬の沓が下げてある「あれは何か」と聽きますると「あれは赤痢除で御座います」と答へた、ソレから「斯樣な事をして赤痢が防げるならば我々が心配して歩きはせん、若しも高貴の御方が御通行にあッたら何うする、頭上に斯樣な不潔な物が下がッて居ッては、第一無禮ではないか」と言ッたこともありましたが必ず斯う云ふ妄信者の多い市町村には疫病が漸々蔓延致しまする。又天理

敎會の信徒で、豫防委員の一人でありました人がある、是れは何ふも非常なお凝信で、病氣に罹ッてもなか〳〵藥などは用ひない、此人が竟に赤痢に罹ッて「天理敎會」を言ひ續けて居る中に、一家より八人の赤痢患者が出るやうな始末にありました、これは岡庭良平と申して世田ヶ谷村の人で有りまする、或る警部が此人に逢ッたときに「何うだな今度は天理敎會も役に立たなかッたな…………」と言ッて笑ッたことが有ります。決してさう云ふことを妄信して病氣が逃がられるものではない、又斯う云ふ話か有る、某地方で赤痢の蟲をば鮒が好んで食ふ故に生の鮒を呑むと假令腹の中に赤痢の虫が在ッても鮒が食ッて仕舞うと言ふものがありしに又一方に「いやソレは鮒より泥鰌の方が宜い、大きな泥鰌を活きたる儘三尾丸呑みにすると、赤痢の蟲は泥鰌が腹の中で食ッて了う。是れが一番宜しい」と云ふのを聽いて「或人がソレならば三尾と云ふのを、十尾呑んだら何ほ宜からう」と斯う思つて、十尾の泥鰌を嚥下し竟に非常に激烈なる胃病を發して、ソレが爲めに死んで了ッた斯う云ふ愚な事をした爲めに一人が生命を喪ふのみならず其餘弊にして澤山の人に病氣を傳播せしむることゝなる即ち傳染病を增多する一の原因で有ります。

(第三)衛生思想の空亡　第三に何う云ふ事が傳染の原因になるかと云ふに、衛生の何物たるを知らざる結果である、傳染病に罹ッた時、其後の處置が惡るい結果である必ず人は怠りなく豫防をし若し病を發したる時は直ちに醫師の治療を乞ひ、消毒を嚴にするを肝要と致しまする左なくんは病氣

赤痢病豫防に就て

が忽ち蔓延するのであります。輙ち河流に汚物を投げたる人は、自ら多くの人を殺し、病氣を蔓延せしめて嬉しいと思ふ心は決してない、俗に河水は岸を三寸離るれば清いと云ふ樣なことを信じて上流では汚物を洗ひ、下流では飯櫃を洗ふ樣な事をして居る、ソレは皆衛生と云ふことを知らぬ結果から起るのであッて、決して故意に出づるのではない、一般の人に衛生の思想が無いからで有ります。故に衛生の思想に富んで居る人民の多き土地では、假令病人が一二人在りましても決して之を蔓延させぬので有ります其一例を擧げんに曾て芝伊皿子の伊藤總理大臣の邸第の前に在る新屋の老婆が虎列刺に罹ッて死にました、ソレと同時に同長屋に住んで居るものが幾人か病氣になッた何う云ふ原因かと調べましたれは新屋の老婆の汚物を向ひの車井戸で洗ッた、勿論米も磨けは器物も洗ひ、飲料にも供して居りましたる井戸あれば洗濯の際虎列刺患者の糞便が其繩に着き從て水に入り其水より傳播したと云ふ事が明かに解りました斯る事は畢竟人々の腦裡に衛生の思想の無い處から起る、椿事でありまする故に衛生會などの盛な處には決して爾う云ふことはない、今其比較を御話すれば、北多摩郡の府中警察署管内中府中は人口の多さに拘らず、一向病人が少ない、之に反して田無は人口も少なく其土地も狹いに多數の病人を生しました何故かと云ふに府中は隆に衛生會が起ッて會員も多く赤痢を豫防する爲めに人民は熱心に衛生上の演説を致し、幻燈を以て赤痢の恐るべき事を示しなどして人々大に奔走して居る。又一方の田無は一向衛生上の思想に乏しく、從ッ

て衛生會などと云ふものも微々として、會員も亦甚だ少ない、其結果は實に田無の管內には八百人の赤痢患者を發し、府中は三百余人、之を土地の大小、人口の多寡の上より觀察しますれば、衛生思想の發達せる處と然らざる處とは、大なる差のある事が御解りにならうと思ひます。

（第四）衛生法の不備　第四に病氣を增多せしむるには何かと云ふに、總て衛生の事に無頓着の國は病人を多く出すとの一事であります、則ち之を小にしては村の豫防委員、市の議員が無責任でありて、黨派的の感情より當路者が充分の計畫をしても其費用を減ずると云ふやうな事をするこれが病氣をして蔓延せしむる大なる原因であります。私は謂ふ、斯の如き事をなすのは我同胞の死を喜ぶと一般なりと凡て是等の要職に在る人は傳染病の流行時は卒先して豫防法を講じなければならないのであります。

（第五）無効の賣藥　其次に病氣をして蔓延せしむるは賣藥で有ります、世には某大家の姓名を利用して、何某先生藥方の濟急飲、或は救急飲杯と大法螺の能書を附し、或は赤玉とか唱ふるか如き種々の賣藥を販賣して疫病に大効あるを說く奸商が有ります、衛生の智識なき者は之を一向に恃んでソレが爲めに病氣を隱蔽する、此隱蔽は輙ち賣藥の効能書の結果でありまする何なれば賣藥の効能書は即ち人々に安心をさせる爲めに人々は醫師の診斷さへも乞はず自から病氣を隱蔽せしむるを作らしむるからでありまする實に之が爲め竟に自分ばかりでなく、家族の者に其病毒を傳へて孝行を盡さなければならぬ父母、最愛の妻子を苦しま

しめ遂に警察の耳に入ッて、是れは届けなければならない、避病院に送らなければならないと云ふ様な事になりまする併しながら前に醫師に懸ッて居らぬから、治療手遅れとなッて空しく不歸の人となり了ります、是れが賣藥の途方も無き効能で有りまする。凡そ世の中の賣藥中には立派な名稱を附けて著しき効能書がしてある、赤痢に就ても立派な妙藥が有ます、果して之が眞でありましならば、コッホ先生ペッテンコーヘル博士も駭くで有りませう、是れも病氣を増殖する一例で有まする。然るに五粒の丸藥を服すれば七十五日赤痢に罹らぬと云ふ様ななにか解らぬ賣藥を、小石川音羽町邊で發賣致しました、之を世田ケ谷の人は皆買ふて持ッて居りまする、私は斯う云ふ怪しき賣藥に依頼して安心をして居るものは生の惜しいことを知らぬ人と思ひます、果して眞に爾う云ふ妙藥が有りますなれば私共は疾くに一大製藥所を建て、右の藥を製造致じますがさういかぬから彼方此方奔走をして衛生上の演説をし、消毒豫防に大騒ぎをして盡力して居るので有りまする、此賣藥なるものも流行病をして一般に傳播をさせる一の原因で有りまする。

其他若し疫病が發しました時は、何うしたら宜からうと云ふことを考へなければならない、私は一度病氣を發した上は、餘程注意して罹病者個々の德義上からも早く健康者と別れて、他人に迷惑を懸けない様にすることを望みます、發病した上は健康者と相分離することが一番宜い、さうすると多數の病人が出來ずに濟んで了ひまする、然らざるときは家族傳播をする恐れが有ります、若しも

此際に當ッて避病院が不完全であると、世人が避病院は即ち死避病院は死病院也と考へるやうになります。故に市、町、村、區にはソレ〱立派な避病院を建設して、病人の待遇を好くしなければならない、郡には割合に病院が能く整頓て居ッて、鷄卵ソップを送るとか云ふやうにあッて居ります、ソレで私は此東京にも一區内に一ヶ所の避病院を設くることを望むので有ります。傳染病はよく消毒が屆けば宜いのですから避病院が隣に在ッたからとて決して恐るゝことは無いので有ります、先刻申した樣に、小山は戸數二百三十戸の中、僅かに一戸を殘して他は悉く赤痢に侵された、輙ち其一戸と云ふは病人收容所の前の家であります。此家では生物は一切食はぬ、水も一旦沸騰して飲む茶碗其他の器物も煮冷しの水で洗うと云ふやうにして、大層消毒のよく實行せられた家で有りました、その如く近所に避病院が有ッても此方の攝生豫防さへ宜しければ大丈夫であります、而して病氣の時には一刻も早く避病院に入院して家族の者に傳染しない樣に計らなければなりませぬ。赤痢病が一度家内に入りますと、容易に逃げて往きませぬ、故に避病院へ往くのが可厭だか云ふやうに、荏苒して居ると、自宅其者を避病院の樣にしなければならぬ樣な事になります。先刻も宮本君から御談話の通り、從來東京には餘り赤痢の流行を來たしました事はありませんだに、去る明治二十六年には百十七名、二十七年百九十七名、二十八年百五十二名、二十九年千三百六十二名、本年は六千四百七十三名と云ふやうに、漸く病人の數が增加して來まして、此割合で蔓延しま

したら、來年は非常に澤山の病人の出づるやうなことが有りはせぬかと恐れまする、故に一家の中に若し不幸にして病人が出來たなら充分嚴重に消毒を行はなければなりませぬ、殊に糞便を消毒することに、重きを措かなければならない、此際に當ッて病人も病院へ送らるゝことなどを拒んではならぬと思ひまする、或時巡査が北多摩郡久留米村の避病院へ其家の娘を送る爲に參ッた、さうすると其處のお内儀さんが大へんに拒んで、強いて連れて往かうとしたら「娘泥棒」と連呼して罵ッた處が此避病院は大層行屆いて居りまして、其後娘に對ひ「病院に入院して心地は何うである」と問ねましたら「病院に這入ッて大へん爽快致しました」と言ッて既に快復期が過ぎて退院が出來るやうになッても「どうかモウ少し置いて下さい」と言ッた、ソコで親も非常に喜んで、曩に巡査に無禮を言ッたのを謝して居る、實に此娘は幸にして早く連れて往かれたから、癒ッたので有ります、總て病に罹ッても早く入院をすれば大抵は治療が屆きまして死數を減じます。北多摩郡武藏野村に於ては自宅治療をしたのは三十二名其内死亡廿人、入院したものは四十八名其中四人死亡したるのみであります。國分寺は二十七人入院して一人も死なゝい、ソレから茲に善い御話が有ります村落などに在ッては非常に病人が蔓延すると、收容所に寺院を借りて之に當てなければならないので有りまする、北多摩郡小狛江村に病人の出來ました時に、村内で、此方の檀那寺には彼方の寺の檀家の病人は容れない、と云ふ樣な故障が起ッて悶着した時に、秋元谷藏なるものがあッて、若し

も近所に病人が出來たら早く一ヶ所に集めなければならぬと云ふ必要を豫ねて聞き知りした時偶々自家に不幸にも一人の病者が發しました其後所々に多くの病人が出來ましたので、谷藏謂らく「早く此病人を一ヶ所に集めて適當なる治療消毒を施さなければ、多くの人をして、不幸に陷らしむる譯である」と遂に自宅を收容所に借した、處が其近所から苦情が起ッた、けれども病人を集めるは善い事であると深く考へましたから、衆議に抗して集めて仕舞ッた、ソレが爲めに、其近傍にも病人が出ない樣になりました今日にては衆くの人が此谷藏の義俠心に感じて居ります。又小平村高橋何某ある人は、此村から病人が出ました時矢張り寺は借さぬと云ふので、他に收容所に當つべき處がない、けれども病人は一人あッても嚴重に消毒を施さなければならない、自分の家は七十人迄は容れられる故、自分の家を借さうと云ふことになりました。然るに近隣の者が「彼處に避病院を設けられては困る、強いて設けるとあらば從來御交際はしない」と云ふ勢であッたさうすると高橋何某は前に借さうと言ッた義俠心を翻して、借さぬと云ふことになッたので、遂に此村では二百余人の患者が出でゝ百余人死んで了ッた……後に避病院を設けてから大に死亡數が減じたので、はじめて避病院の難有いことが解りました。爾う云ふ樣な例は尚ほ色々ありますが、今日は是れだけにして置きまして、猶ほ豫防上の事に就て少しく述へて置きたいと思ひまする

豫防上の事は轉ばぬ前の杖故、飲食物を愼むは勿論の事で有ります、先刻菓物は食ふても赤痢には

ならんと云ふ說を宮本君は謂はれました、私もソレには固より同感ながら、なか〳〵爾う云ふ事を迂濶言ふことは出來ない、先頃衞生局長が靑梅に巡視されました、時に、「先生水瓜は何うでしやう、」と問はれた衞生局長答へて曰く「適度に遣るなら宜からうと、けれども彼等の適度は何を標準とするか、腹一杯に食ふを彼等は適度と思ふて居ります、ソレで「今日は衞生局長が適度に食ふて宜い」と言はれたからと云ふので、飯の代りに飽くまで水瓜を食べた、すると腸加答兒を起し、次で赤痢に罹ッて死にました、是れは事實談で、此處に御列席の御方などには宜いが、世間の阿呆漢に爾う云ふことを言ふと間違ひが起る、其邊は余程うまく遣らんと遣り損ひます、故に牛乳は必ず一旦煮沸して飮んで貰ひたい水は先刻も御注意のあッた通り、沸騰すれば黴菌も死んでしまつて、安心して飮むことが出來ます。支那人朝鮮人は割合に赤痢に罹らむ、ソレは彼等は決して生物生水を飮みませぬ故です、丁度私が其所に參ッたときに、豫ねて本邦に渡來せる朝鮮亡命の者が日本人は生物を食ふから不可ない我邦の者は皆なんでも煮て食ふ」と言ッて居りましたが、全く日本人は生物が好きで有ますする。彼の不潔なる支那人でさへ、水は飮まないと云ふ程故、どうか水道が完備して良い水の供給が出來るやうになれば兎も角、ソレまでは生水は一切飮まぬ樣にして戴きたい茲に私は皆樣方の御注意のために、下婢の失策談を御話致さうと思ひまする、或時某家の奧樣が「下婢や此比は赤痢が流行するから宵越しの物を食ふてはならむ」と言ひ聽かせられた、さう

すると、下婢はソレでは是れから餘りものは棄てなければならぬと考へた、或日茄子を湯立て〻味噌合を拵へた、處が擂鉢に半分位殘りました、さて下婢の謂らく「翌朝まで置くと宵越しになる、今晩の中に食へば格別の事はあるまい」と云ふので殘さず食ふて仕舞ッた、さうすると間もなく俄に吐くやら瀉すやら、大事になりました。下等社會などは兎角斯う云ふやうな譯で「宵越しの物を食ふな」と云ふ注意さへ迂濶には出來ませぬ。ソレから或化學者が、或老婆に說いて曰く「アルコールハ小さき蟲をも殺す、ソレ位の強いもの故飲むことは惡い」と老婆謂らく「アルコールはまことに好い物だ、水を飲む度毎に少し宛加へて飲まば必ず赤痢の蟲も殺されて了うで有らう」と、ソレから度々アルコールを入れて飲んだその爲めに腸胃を惡るくして死にました、實に圖らざる斯う云ふ間違ひも生ずる事さへ有ります。

先づ病氣の發したるときは、先刻申した樣によく消毒を致し隔離をするのは宜い、それで清潔法の事に就ては既に先刻御話が有りましたから、別に申さぬが、何ほ御注意を願ひたいのは、清潔法は毎日よく整ふて置けば一概に大事に塵埃を出すには及ばぬ、一時に塵埃の澤山に出ると云ふのは平生の掃除が惡るい故先祖代々の塵埃が出るので有ります、毎日よく掃除をすれば決して塵埃の溜るものでい、室内の掃除は勿論井戸に破損は無きか井戸側は如何、流しは如何下水は如何平生氣を附けて置けば、速かに氣が附いて大騷ぎを遣るやうな事はない、殊に東京の下水は雨が降ると溢れて了まひますソレであるから清潔方法は毎日に掃除

〇〇〇をせよと云ふ事で有りまする、消毒法は燒くのが最も宜く、或は蒸し、或は煮沸し、或は藥物消毒と有りまする。石灰乳は消毒藥として大へんに宜い、昇汞水の糞便に用ひて無効なることは解ッて居りまするが、ソレのみならず世の中の人は兎角間違ッた消毒法を施して塵挨溜に眞白に石灰を撒くやうなことをする、私は或處に往ッて見ましたに、石灰乳を撒くに、溝を畫き、或は柳の葉を畫き、又罪もなき岩、植物などに撒布してある、ソレ等は甚だ無益な消毒です、殊に白い物は安心するが、併ながら一遍丈けは利きましても、後には効能が無くなります、ソレでも白い物が懸ッて居ると、能く消毒がしてあるやうに見えて人が安心をして、後の注意が疎かになるから、かゝる無益な消毒の仕方はなさゞる樣に願ひたい。又消毒藥として灰が有効のものであります、但し藁灰及ひ石炭灰は無効ですが、木灰ならば宜い故、通常の石灰の無いときには灰を用ひるが宜い。又常に灰水を造ッて置くが宜い、其割合は一杯の灰に四杯の水を混じて煮るのです、而して其灰水で茶碗を洗ひ、疊を拭いても淸潔になります、加ふるに赤痢腸窒扶斯の便に灰を當分に入れゝば、充分に消毒し得られます、斯う云ふ事はやさしいことであるから、平素より心得て居ッて。石炭酸石灰の得られざるときに用ゆるが宜い。

其他平素の攝生法に就ては、學校の教師から生徒に說き聽かせて貰ひたいと思ひまする、實に輦轂の下に澤山の病人が出ては、至尊に對し奉りて甚だ濟まぬことゝ思ひまする、今私は恐れ多い事ながら大御心のほどを御話致しまするが去る日々

天皇陛下が英照皇太后の御陵御參拜の爲め京都へ行幸中、東京に痲疹の流行することが彼地に聞こえまして、恐れ多くも東京の府民が如何に疹痲の爲めに惱むか、日々何人病人が出來るかを、皇宮警察を經て我々共の方へ御下問になりました。一体日々の傳染病の數は、皇宮警察の方へも達するのでありますが痲疹は八種傳染病外のもの故ソレで態々御下問になッた譯で有りまする、うして此奏答が少し遲れても御催促になる、ソレ位我々の病氣に對しては上は御憂慮になッて居らせらるゝのですから、此際陛下の臣民たるものは能く身を重んじ攝して、決して柿なとは食はん樣に、學校の敎師などは充分に其事を生徒に諭示せられん事を希望致しまするので有りまする。

終りに臨んで電氣燈の注意を一言致します、爰に電氣燈に就て注意を記したものが百枚ばかりありまするから、電氣を使用せらるゝ御方は御持歸りを願ひ度ござります是れは電氣燈に打れて死んだときの救急療法が書いてあるので御座います。新聞上で皆樣も御存じでありませうが、二三日前の夕神田錦町江知勝の下婢が電氣に打たれて死にました何う云ふ有樣であッたかと云ふに垂れ下がッて居る電氣を戸口に懸け樣として持ッた、一体電氣には針金の上に護謨若くは絹絲が卷いてあるのですが、其處が剝落して針金が顯はれて居ッた爲めに電氣に感じて「ア痛た」といッた儘倒れて仕舞ッた、ソレから傍らの人が手を開かうとしたが開けない、何故かと云ふに手が濡れて居ッた爲めに電氣が強く感じたので有ります。斯う云ふ過ちが後來有ッてはならむから一言御注意を申しま

すが、常に電氣を使用するものは餘程注意をしなければならない、今日文明の恩澤に因ッて、種々の事に電氣を使用する樣になりましたのですが、總て好いものにはソレに伴ふ危險が有りまする。醫師は「モルヒ子」「ストリニー子」等の藥を用ひますが、是れは非常の劇藥にして、少しく分量をも過つても、人命を絶つ恐れが有りまする。ソレ故に電氣を使用せんとするものは、針金に卷いたる絹糸護謨等の剝げぬやうに始終注意をして危險を避けなければなりませぬ、殊に濡手は危險であります能く電氣がつたひますから且ッ又若しも打たれた時には人工呼吸が必要である、それてありますから打たれた人の兩臂を持ッて強く伸ばすか、或は腹を壓して呼吸を強くすると蘇生することがあります。電氣は木の柄あれば宜いが金だと危險が有りますから、毛織の布或は着物で引張るやうにしたら宜しからうと思ひます、之を鳥渡御注意申ます、注意さへあれば文明の利器は言ふまでもなく便利の物でありまするから、何うぞ此利器に因ッて不慮の怪俄の無い事を希望致します。なほ又疱瘡が近來稍流行して來ましたから、何うか一刻も早く種痘せられんことを冀望致します

赤痢病の豫防に就て

宮本仲君　演說

私は本題に入るに先だッて一二の御斷りをしなければならない事が有ります、ソレは今日皆樣は豫て會場と定めて御通知したる神田區役所に御出でになッて、更に此方に御廻はり下すッたこと、思ひます、誠に恐入ッたことで有りましたが、併

ながらソンは本會の幹事さんが不行屆ではないので、其責は私に在りますから、私が皆様に御わびをしなければならむので御座います。一体當月は神田區で御開會と云ふことでありましたから、然らば神田區役所が中央で其會議室を借り受けるが便利で宜しからうと申出て、私から澤區長に相談をしました、區長より更に市參事會に協議して承諾を得、愈々同區役所を貸すとの書付まで廻はされた位でありましたが、急に何か神田區の事に就て、當區議員か夫の樓上で會議を開かなければならぬ必要が起ッたとのことにて、余儀なく今日借受けの事は謝絶せられました、當會の方も切迫して居るに私は間に立ッて甚だ迷惑で有りましたが、併ながら衛生會は大切ながら謂はば私事で有ります、又向方の會議は一區の事に關する事で殊にソレが爲めに建てられてある議場故、區長の謝絶も已むを得ざる次第で、敢て區長に故意の有る譯では無からうと思ひますから、會長に御願ひを致して急に場所を變へて戴く樣なことに至ッたので御座いますが、元私が御引受をして置きながら甚だ粗漏なやうなことにありましたのは、誠に恐縮の次第で御座います、

第二に御斷り申し置くは、今日私の御話することは爰に掲ぐる如く「赤痢病の豫防に就て」と云ふ演題で御座います、赤痢病は文字の上から言ふと鳥渡赤くてうつくしい樣であるが、實際は美しい處ではない甚だ汚ない病故此赤痢病の御話をするには隨分卑陋なる言が出ます、貴婦人方の御前にて發言致し難い譯ではありますが衛生會の此演題の事なれは、一々ソレを憚ッて申し述べぬ譯

には參りませぬ夫れ故甚だ失禮ではありますが是れは前以て御斷り致して御宥恕を願ひ置きますから左樣御承知を希ふので有ります。

只今三浦博士から利益ある談話が有ッて、其後で私が詰らない御話をするのは實は困るので有りますが、山根君が面白い御話を澤山持ッて居られますから、後刻同君から有益の御話の澤山あるやうに御願ひ致しました。私のは極く詰らない事故居眠をなされたくば私の饒舌ッて居る中に成すッて、山根君の御演説は耳孔を明けて御聽き取りを願ひます。私の談話が面白くない爲めに御退屈をなすッて、ポッ〳〵御歸りになる樣なことか有ると、山根君が不愉快に感ぜられ、又折角有益なる事も効能が少なくなる譯ですから暫く御忍び下すッて、後の面白き談を樂みに御待ち下さるやうに此も豫め願ッて置きます。

さて赤痢は御承知の通り一の傳染病で誠に恐ろしき病氣で有ります、只醫師が恐ろしいと申しても素人の方は實際に踏み込まれて見なければ其の恐ろしさを御承知にありませぬ。總て傳染病は自分を疾み其身を滅すのみならず遂には國家をも亡すに至る實に恐ろしいもので有ります「傳染病が流行した、あゝ恐い」と言ッて自分のみ傍を向いて居る位で濟めば宜しいが、若し傳染病か斷へず流行する時は人民が弱り家が衰ひ追々と國が滅亡して了うので有ります。私は一昨年西は九州中國、東は奥州の邊に向ッて廻國し檢疫豫防に從事致せる實況を視察しましたが、其際諸縣に於て虎列刺、赤痢病に就て種々の實驗談か有ります、就中不注意なる小事より實に恐しき大事か初まりたる

話なとも有ります、原來此傳染病の豫防といふてとに就ては畏多くも　天皇陛下より勅令を下されて人民に之を行へとの御沙汰あり內務大臣が其旨を奉してソレ〳〵の官に訓令して嚴重に注意を促して居られますから一家一個人民に於て疎畧があッてはならぬ筈であり升、殊に列せらるゝ東京府の參事官此方々等も、此府下の衞生事項に就て非常に、心配盡力して居られます。又山根君なども常に此事に就て頭腦を惱まして居らるゝ譯で有ります、ソレにも拘らずなか〳〵傳染の勢ひが熾んで病が無くなると云ふ譯に參りませぬ。東京には前々より虎列剌は隨分盛に流行しましたが、赤痢は餘り是れまで有りませんでした、ソレ故人が赤痢の恐るべきことを能く知らなかッたやうであります、併ながら近年は漸次此流行が著しくあッた故人々も漸く之を見聞するため赤痢の恐るべき事が其の腦裡に併ッて來たやうで有ります就ても私は尙ほ此病の恐るべきことを一二御談し致します、元來虎列剌も恐るべき病では有りますが、虎列剌は流行するときは一時澤山の患者を出だしますが、流行から流行までの間が餘程長く息んで居ります、ソレ故、時々ある虎列剌の流行より年々有る赤痢の方が實は恐ろしいので有ります。私は一寸調べて見ましたが、明治九年より二十九年九月迄に日本全國の赤痢病患者は八十万五千百七十九人、其中死亡者十九万三千五百八十九人である虎列剌の方は多分五十万外內であッたかと記臆して居り升口に容易八十万と云ふが其の人口は非常に澤山な數であります。日本國中で廣いと稱する縣々ですら、其人口は八九十万であります、福岡

の如き大縣で百二十余万人秋田縣などが七十余万人佐賀縣の如き小縣ロ僅に五十二万に過ぎない故に明治九年より二十九年九月迄の赤痢患者を一纏めにすると、輙ち奥州の北端たる秋田縣全部と青森縣の一部と云ふものが日本國の病人即ち赤痢病に罹ッた樣な譯で有ります。又た虎列剌病と赤痢とを合すれは殆んと東京の人口若くは九州の福岡縣位が皆病人であッた割合數であり升即ち日本か夫れ丈け弱くなッたる譯です偖て此二十年間の中最も赤痢患者の少なかッたのは、明治十年から十一、二年の比で、明治十三年には餘程多く有りました、明治十年は日本全國で三千零九十人であッた、ソレから以降明治廿七年は、戰爭や何かで内外多事であッた爲め、自ら豫防法等の屆かざりし所以か、日本全國の赤痢患者が十五万人有ッた、此二十年間の患者八十万人を聚めると、東京の人口が半分以上赤い縞い着物を着て居るやうな譯になッたので有ります。斯う云ふ次第で有りますから赤痢患者ある家人等が「赤痢病が有ると、喧しく巡査が叱言を言ふから屆けなければあらぬあろうならば内處にして置きたいなどと云ふやうお考へを仕て居ては大へんな間違ひです。傳染病が一家に出來たならば早速届出て、公然消毒豫防に從事するが善い人々が日本國の爲めに斯う云ふ病人を減らし、又一家一身の爲めに、斯う云ふ病毒の全滅する樣にと云ふ考へを起さなければならない、反之傳染病を隱蔽して其病毒を蔓延せしむる樣では國家に不忠義であろうと思ひ升御互はかゝる病に侵されざるやう銘々にて注意せんければはならぬ。公衆の衛生に就ては貴女方は御盡力下さ

るにも及ばぬから、一家の衛生一個人の衛生に就ては充分に御注意御盡力を冀ひたいので有ります、一個人の衛生が能く行はれて、病人が無くなる様にと各自が心掛れば一村一町より廣く一國の法令も能く行はれ、從ッて傳染病の數が減じ日本國の人民が無病にて益々強くなり國家も富んで來るのであります、假令戰さには勝ッても、赤痢が蔓延して病の爲めに斃るゝものゝ多き様ではなんにもならぬ、戰さは無いにしても傳染病の損害の非常なる結果は所謂富國強兵なるものゝ反對事が現はれ來るものであり升私が奥州の某地方を巡回した時に斯う云ふ例が有りました、即ち某處に於て縣廳郡役所等より避病院の建設を頻りに催した然る處其土地の有力家は此を空吹く風と聞き流して居りました、ソーすると一の有力家の隣家に細民がありて夫れに突然と眞症の虎列剌が出來ました、依て該有力家は大に駭いて其細民を避け様と思たナレ圧今や避病院が無く病人を容る處が無い仍て其家では自分の方から避け様と召使の者共を留守居に置き家族一同で逃げた、逃げはにげたが傳染病ある近地の人と聞て容易に車にも乘せないので已むを得ず三倍五倍の賃錢を拂ッて漸く車を雇ッて他に避けて、某旅店に投じた處が、宿屋は宿帳に附けた地名を見て。泊めることは欲しないと謝絶されてソコで非常に窮ッて、宿泊料手當等を高く出して、やう〳〵泊めて貰ッた。即ち諸費用の皆な定められたる額より五倍も八倍も餘計取られ、二週間ばかり經て漸く村に避病院の落成したる後家に歸ッて、始めて安樂に眠むることが出來た。此より先き內務大臣より同年は戰後衛生を

厳重にせん爲め種々の訓令を發せられて、知事をはじめ其役員が盡力して避病院建設を命令をしたのに此を奉しなかつた爲め自分の方で避ける樣になつて、二週間の中に、田舍の金で百五十圓とか二百圓とか冗費に消費したソーして「此位なら早く醵金をして避病院を建てるのであッたに」と言つて後悔歎息をしたと云ふ話が有りますが、洵に傳染病の豫防は平生から心掛て居らなければならむ、猪が飛んで來たのを見て、矢を作ぎ弓を削る樣な事をしてもなんの益もないので有ります。當府下にも最少し善避病院が欲しい赤痢病の恐るべきは今御話をした通りで、彼の二十七八年の役に於てすら八十万人からの傷死はない、然るに赤痢は此大多數の人間を襲ひます、今東京だけて調べて見るに、明治十四年以來昨年十二月までに千八百六十五人の赤痢患者で極く僅かで有りました就中明治十七八年、頃は二十名内外であッた、然る處本年は豫防が、屆かざりしか、將氣候不順の故か、既に今日までの東京市の患者が、昨年よりは多きに達しました、即ち其數は昨朝迄に六千四百五十一名全國患者は六万四千八百五十余人、中死亡者一万五千人、斯くの如き經過で有るから此勢を以て年々殖へましたら、東京は實に不潔で赤痢病の滅せざる限りは東京の繁昌を失つて、其損害をは及ぼす處は實に非常なもので、有りませう、是れまでは九州島根越中四國などには此病の流行が盛でありましたが怪物と同じく箱根以東は、幸にして少なかッたので有ります。處が汽車が出來た爲めに、漸く近來は東京にまで盛に此流行病が來ました譯であります。ソレ故今日より後追々窓

くなッて假令病勢が衰へたにしても「最早赤痢病人が一人も無くなッた」と言ッて油斷をすると、來年の夏から秋にかけて大流行を來たしまして、本年の六万は愚か來年は十万になるか、若くは二十万になるか解らぬから、願くは貴婦人方が一家〳〵の衛生豫防に御盡力下すッて來年は此病人の一人でも減ずるやうにして下ださらなければならぬ、前年は箱根以東に大流行がなかッたが、近年は汽車人力車の便利に因ッて病毒が東京の方にまで傳播すると云ふ事を前に申しましたが後で御注意を述べる時の參考として其一二の例を序でに御話しを致しますその事實を御聞になりて、能皆樣が病毒の恐るべきことを御會得下さるやうに致したいと思ひます、其例の一は山梨縣鰍澤より靜岡縣岩淵驛の方に舟で乘下だす彼の富士川に沿ふて縣道が有る、(其縣道より身延山に往く道も通じて居る(其縣道の直近傍にて身延山から數里隔ッた所に楮根と云ふ一の小村が有ッて、戸數は凡そ百五六十戸有ります、此村に一筋の用水があッて、主もに飲料等に使用し間々雜用にも供して居る、而して其水は縣道の傍に流るゝ富士川に落ちて仕舞ふ、數年前の事でありましたが、此楮根村に突然赤痢病が流行しました、其原因を段々探究しますと身延にでも參詣したのか商人が縣道より入ッて此近傍道を通ッて其時に遽かに便意を催して、此村の某農家の便所を借りて用を濟ました、處が腹が痛くて堪へられんので、一旦は出て草の上に休らひたが又再便所を使用して歸りました其者は何處に通行したか一向分らない、併し後で見れば其便所にはチラ〳〵赤い色の交ッた糞便があッた

ので多少怪みはしながら痔血でもあるならんと其儘棄て丶置いた、然る處此便處は用水の先ッ上流に近接して居る分ですから甚だ危險で有ります、或る日此家に一人の下痢病人が出來たけれども衛生抔には少しも頓着せぬ農民の事故、鄰の商人の御土產が傳染た赤痢病ありとは思はないから其の汚した處の衣服、便器等を洗ッた水を用水近くに打捨てた或は其川で手位は洗ひました、恐らく此れが原因で此用水を使ッて居る百五十戸の中に於て、約百名からの患者が出來ました、此事が早く既に縣廳に聞へた故其向きで役員は大騷ぎをして、其原因を取調べ檢疫豫防等を嚴重に行ひました故追々病勢か衰退してしまひました即ち其原因を取調へられたる結果、全く前に述べたる旅人の便で有ると云ふことが解りました。ソレから又御話が枝葉に渡りますが一の例は虎列剌病に就て申しませう是もに此赤痢に於けるやうな例は澤山あります例之は石の卷佐世保の流行でありま す。佐世保に於て一番先きに病に罹ッたものは、征淸者より分捕品の掛軸を送ッて來た家にて其掛軸を取扱ッたその家の女房であります、元佐世保と云ふ處は、用水に不足して且ッ不潔で上流では之を雜用に供し下流では直くと米を磨き食器を洗ふと云ふやうな有樣で新開地の事で不行屆勝ちにて懊くほど不潔です、さう云ふ譯故一人病者が出來たので病毒は川より傳へられてポッ〳〵患者が出來ました、併ながら鎭守府が在りますので盛に豫防法も行はれて、僅かにして滅なりました。又石の卷も矢張り兵士が脚氣で歸鄕した其時に分捕の支那錢を持ち歸つた、（ソレは既に消毒しある筈ですが

ら恐く此れか原因て無いかと思ふ併し不明です）其錢を凱旋の祝宴席にて人々に見せた處が、或る老爺が珍らしがッて臭を嗅いだり、撫でまわしたりして愛玩して居ッた其老人が翌々日頃一番初め吐瀉を催した、此巳前に同地に吐瀉患者のありし事なしと云ふも此も亦た不明）處が傳染病であるか何うかと云ふやうな事は固より一向知らないから、用水川で汚染せし物を洗ッた、夫れが原因で其用水よりして遂に石の卷の川に添ふて病人が續々と出來ました是れ等の二例は果してソレが原因か、或は是れは偶然の出來事かも知れませぬ、撿疫法の開設せられてより後は何處にても一切撿疫が嚴重で、分捕品を密に持ち歸ると云ふ樣な事は、容易に出來ますまいと思ふ、故に是れは軍人の持ち歸た品物に原因せずして外から傳染して來たのであるか、判然しませぬが、兎に角該女房や其老人が發病第一でありました、但し虎列剌の毒は斯樣に器物に依りて遠方まで傳播すると甚だ疑はし殊に銅錢の如きもの丶表面に病毒が付着して清國より奧州までも來る筈は無いと思へます尤も痘瘡の如きは書狀や物品に付着して歐州より米國の方に渡航した抔の例なきにあらされとも、虎列剌菌は然るものに非さる故、此の佐世保幷に石の卷の病原は掛物と錢とにあらすして必す他にあるべし、原より此二例の取調は素人の側にて爲したるもの故に吾々醫士の考へには合當致しません、此例は曖昧して居るから皆樣の御疑ひもあらうと思ひますから、尙ほ私は明瞭なる例を御話致しませう。

ソレは虎列剌が旅をしたと云ふことです、世の開

くるに從ッて病氣も遠方に往來致します即ち一昨年の七八月比岩手縣の人が十五六名連立ッて伊勢參宮やら東京見物やらで諸方に參り、十余日で東京より通し滊車で岩手縣へ歸る途中一の關の手前の小午田の停車場に着いた、時に其中の一名が腹工合が惡く便意を催したに就て其停車場の便所に往ッた處が、或は吐し或は瀉した、彼是して居る中に滊車は此人を遺して發して仕舞ッた、ソコで停車場前の茶家の女房が、旅人のなやむを氣の毒に思ふて自分の家に連れて來て介抱をして遣ッた然るに其日は滊車が發しませんので、其儘泊めました、處が其夜復吐瀉をした、其小午田の停車場の傍にて小川が流れて居る、此川は用水でありまして其川を挾んで此茶屋と一の民家とかあります乃ち其夜茶家の女房は該患者を看病して其れに用へた金盥や其他の汚れ物を其川で洗ひまして元來其患者の傳染病なることを知りませぬ故別に恐れもせなかッたシテ此旅人は人々の看護を得て幸に翌朝は稍々癒ッたとて篤く禮を言ふて鄕里に向て出立しました、ソコで人々も多く水瓜か甜瓜でも食べて中ッたものと思ッて居ッたさうすると後三日目に其茶屋の女房が吐瀉した、是れも矢張り旅人より傳染したとは思はないで實母が實家より來りて看病をして居ッた、其中に此婆及 亭主にも感染し殊に對岸の民家の娘も同時に發病し、此報が宮城縣に達するや役員か出張し虎列剌なりとの事にて其原因を取調べた處前の如き旅客の患者の話しか有ッた因て岩手縣に電報して旅人の方を調べると、其男は無事で家には歸ッたが、よく〳〵死神に取りつかれたものと見えて、其晩、いづれ

安着を祝ふて蕎麥とかすしとか澤山に飲み食ひしたのでありませう又た〳〵再發して眞症虎列剌の容體を發して死亡した事が判りました、此例を見ては遠く病毒か旅をすると云ふことが、能く御解りになりましよう是ですから傳染病の流行せる時分には能く〳〵注意をせねは成りませぬ。

サテ是れより豫防に就ての注意を一二述べやうと思ひます。

赤痢病は段々述ぶるが如く、虎列剌と等しく恐るべき傳染病で、何時何處から病毒が來るか解りませぬ、併ながら必ず病毒が有ッて然る後發するので有ることは明かで有ります。而して赤痢病は何う云ふ本體で有るかと云ふに、未た虎列剌や肺病の病毒の如く精しく解ッて居りませぬ。先刻三浦博士の御話にあッた細胞の如き細蟲か、若くは黴菌の種類であるか、二派の議論が有ッて確と定まりませぬ、けれども兎に角細菌即ち植物性の病毒か原虫即ち動物性の病毒かで有ッて、ソレが傳染の種子にあると云ふ事に付ては不同意を唱ゆる人は無いので有ります。其病毒は患者の何處に在るかと云ふに、大便の中に混して居る、而して其毒が盛んに廣がるのは該の大便と共に出で、土地に浸入し水に依ッて彼是に傳播るのは明かで有ります。併ながら直ちに其人の衣服食器から傳染しないとは限りませぬ、病毒の有る以上は何處からでも來ます。皆様は如何に、病人でも房室で大便をしないから室内は清潔で有るとお思ひなさるでしやうが、私は今爰で顯微鏡的の御話をすると、六百乃至千有餘倍位の顯微鏡で見る時には粟粒の幾万分一と云ふ程の微細体でも見える些と變なことを申

しますが、ソレで見ると患者の肛門臀部などには幾許の病毒が混在して居らぬとも限られぬ眼に視えぬから實際解らないが急度あるソレですから襯衣腰卷寢衣等は勿論家具蒲團室内とても、病毒の在る以上は油斷が出來ませぬ、ソレ故便所便器さへ取締れば宜いとは謂へない、衣衾類がなか／＼危い、大便一滴の中にも何万の病毒が有るのですから餘程注意をしなければならぬので有ります。

此病毒が生水の中に混じ來り或は病室にて蒲團寢衣に觸れた手に付着して居つて其觸れたを忘れて其手にて御菓子を食べ、或は煙管の吸口を弄し、若くは唇を撫でる、其機會に乘じて病毒が口に入ることが無いとも限らない、それ故に病人の居る室には必ず病毒が有り、病人の出來た家の邊の水には病毒が有ると云ふ考へを忘れてはならぬ病室では飲食は勿論口圍にも手などは觸れぬ樣に注意せねばならん水も決して生のは飲むべからず。

又赤痢病は如何なる季節に多く、如何なる身体に多く發するかと云ふ事を御承知にならなければなりませぬ。赤痢病の流行するのは、晝極く暖かで朝夕の冷氣の激しき時は所謂晝熱夜冷の繼續する時候卽ち秋今比の如き氣節が最も多くあります。

然らば何う云ふからだの人に多く傳染するかと云ふに、總て傳染病でも惡疾でも人の隙に附け込む善人は人の困厄を見れば救助する、然るに惡人は力足らぬ人だとか、若くは戸締でも惡るい家だと竊盜強盜に押入る、病毒も此方のからだに衛生と云ふ取締りが無いと遣ッて來るソレ故、豫防を嚴重にし養生をも能くせねはならぬ極めて健康の体

であれば万一同じ病氣に罹っても薄弱の人よりは輕く、殊に强壯で且ッ養生の宜い人であれば割合に病毒に感じ難い「ルムプ」と云ふ人が先年獨逸の「ハンブルヒ」と云ふ處に虎列剌の流行したときに取調べたには虎列剌の毒が大便の中に在ッても皆な重く發病する斗りではない百人に就て六十人余位しか其症候を現はさぬ殘り三十人余位は攝生よき爲めか恰も無事健康の如くに過ぎて仕舞ふのがある又た或は少く下利の傾き位て過こすのとある其の發症して、重きのもあり極輕いのもありて、少しく軟便を下痢する位で濟んで了うのかあると云ふことを一々大便を顯微鏡で精査したる統計に付て報告された樣に覺て居りました。即ち其重く發するのは平生不攝生にして腸胃などの弱き人にあり其輕いの若くは未發に濟むのなどは常々衛生法を嚴重に守りて丈夫ある人にあるのでありましう、ソレ故傳染病の流行時には別して注意せねばならぬ、又大腸に加答兒のあるときには赤痢に罹り易い、一体赤痢の病毒は好んで大腸の部分を冒す、而して晝熱夜冷の甚だしき時、或は天氣の濕り勝ちの時などには大腸の加答兒を起し易い、又寢冷をし若くは果物など不消化の物を食らう時も亦た之を起します。赤痢症に能く似たる濾胞性の大腸炎と云ふ病氣は夏秋の頃往々小兒にある病ですが、是れは全体傳染病ではあいか粘液便で往々血が混じて下り腹痛又は澁りなどある等赤痢の流行するときには殆ど確と區別か附きませぬ故此病にも念の爲め消毒法も豫防法も幷に養生等も赤痢の樣に嚴重にしたらば安全て有ります急度左樣せねばりませぬ。

赤痢の流行するときに菓實或は不消化物を食べると赤痢になるだらうのと思ふものも有らうが、決して斯う極ッた譯ではない、水菓子果物などの生物や不消化物を食べる人は其れが病毒で疾に罹るのではなく此は該の體に傳染の素因を付與するのみで（私は今理論を御話するので、ソレだから菓物不消化物を食ッても宜しいと許して御勸誘申すのではない）即ち只罹り易いからだになるので別に病毒が來らねば赤痢にはならぬ乍去感染し易い体にすれば最早疾病に侵されたも同樣恐しい危いとであります、故に喰べなくとも濟む果物などをは無理に食するにも及ばぬ全く之を禁止する方が安心です特に兒童などには假令少量だからとて決して與へてはありませぬ生水又氷水等も亦た同しです何故感じ易くなるかと云ふに、果物即ち桃栗梨柿瓜水瓜等を澤山に食べると腸胃の加答兒を起す、殊に多分の酸味あるものなどは、大腸の加答兒を起し易い、前に申す通り赤痢は大腸を冒し、虎列剌は小腸など冒すもの故、若しも大腸が惡るくあッて居ると、赤痢の病毒が其處に蕃殖し易いのである、例せば畑に肥料を撒き地を軟かくし相當溫かみを持たせて、置くと同じで種子さへ蒔けば直ぐにでも芽を出すと同じやうなからだになるのて有ます。ソレと反對に、下痢を起さざるやうに滋養にありて消化の好い食物を撰び、且つ總て飲食物は養たるもの新らしきもの淸潔なるもの等注意して病毒を避け且つ之を枯殺して食べるやうな方法を取ッて居らるゝ方は、濫りに赤痢や虎列剌病に侵さるゝものではありませぬ、若し濫りに侵さるゝものであるならば、醫師などは眞先に遣ら

れなければならぬので有りますが、幸に私共のからだには一向感染らぬので有ります。デ有りますから一個人一家の豫防法をば貴婦人方が充分に御注意下さらなければならぬ。

一身の豫防とは、第一に赤痢の流行るときは前にも申した通り飲食物に注意を主とし又た衣服を清洗乾燥し身体を清潔にし寢冷をしないやうに、腹部を纏卷いて寢ね、殊に小兒は轉げ出しても寢冷の恐れない様に注意をして大腸の加答兒を起さぬやうにしなければありませぬ、且つ家屋庭園等を清掃し厠舎を消毒するも亦た須要なり、ソレから又御母樣とか、御老人などが小供の望むまにく備荷林檎などを與へらるゝのがありますが此は畢竟愛するのか憎むのか分らぬ、唯た兒童の好むに任せて何でも與へるのは、恐ろしき病毒を食べさせるのと同じと所謂不仁の仁になりますから、寧しろ少し位叱ッても惡い事はさせぬ方が眞の愛でありましよう、流行の際には殊に注意をして、眞の愛を誤る樣なとにあらぬ樣に心掛けねばならない、若し菓實を食べさせるならば菓實を水などが付かぬ樣に氣付けて皮に剝きながら直に食し又は砂糖で煮た(罐詰の類)のを御飯のあとで少々召上がる位ならば宜しう御座いますが、去り乍ら此事は前に既に申上げた通りですから傳染病に罹ッて見たい考への方は御隨意ですが先づ通例ならば禁じて喰へぬ事と致して置く方が宜しいです、何となれば注意深くして居る人の眞似を無智の人までが仕て濫用すれは中々劒呑ですから寧ろ誰れ彼れの別なく上下老若皆な禁制にして仕舞うか安全であります。

サテ東京では目今の如く多摩郡に流行された位恐しきことはない、何故かといへば、多摩郡は東京に供給する水源の地で有ります、先程御話した山梨縣の如く上流を浸さるゝのでありますから、丁度我々の咽喉を捉へて絞めらるゝのと同じです。傳染には水が甚だ危險なもので感傳の媒介は多分水にあります。ソレ故虎列剌赤痢「チフス」など傳染病が流行するときには生水をみだりに飲んでは往けませぬ、殊に濁ッた水は余程恐ろしい目下の水道の如きは甚だ危險で有ります。嗽ひするさへ恐ろしくて安心は出來ぬから決して御油斷成されますな。毎朝煮冷ましの水を以て含嗽幷に口邊を洗ひ（顔も煮冷まして洗へばなほ宜い）口の中に生水を一滴でも入れないと云ふやうに注意を成されば結構で有ります。ソレから又一切食物、食器を湯若くは煮冷まして洗へば此上の事は有りませぬが、ソレは少なからぬ量を要して、さうも参りもせぬから、止むを得ず下た洗ひの分位は成るたけ清潔な水を病毒混入等の恐れなき處より汲み來て用ゐると云ふやうに御注意なされは宜しいので有ります。併し或る不完全の井戸に於ける生水なるものは其の近傍に病人の有る無しに拘らず地水の狀況に依りて遠方からでも病毒を持ち來りて混在して居るとかありますから注意を忘れてはなりませぬ。

續いて御話するは、一家の中に病人の出來た時の心得、御婦人はとかく看病の方に廻はる、さうかと云ッて男は始終病む方に廻ッて居ても困るが……看病をするに就て最も注意をしなければならぬ事は看護者は其人を定め誰も彼もと濫りに病室

に入るへからす、然して其入るときには必す上張りを着、上草履を穿ち又出づるときは必ず脱ぐ、ソレから病室の出入口に石炭酸水か昇汞水を置いて、能く手を洗ッて消毒し時宜に依りては口も嗽くべし消毒もしない手指で其儘飲食を喰べ、煙草を喫むことは決してありません、口嗽しないうちに飲食物を口中に入れてはならん、私共赤痢を診察に往く時或る家では病人の前で茶や菓子を勸めらるゝとかある誠に難有くない、ソレのみならず包んで出さるゝが、私は無遠慮者故傳染病は嫌ですから「其御菓子なぞは眞平御免だ、下すッては却ッて困る」と言ッて御斷りをして仕舞ひます、醫師に斯ふ云ふものを呉られては閉口する。一体斯う云ふ病人の前で食物を强らるのは、實に宜しくない、醫師は心得て避けて歸るから宜いが、素人の側では御知り合ひの人などは、御見舞に來て御菓子を食べたり御茶を飲んだりして病毒までも傳染し御土産に持ッて歸り、今度は自分が人の看護を受けるやうなことになッて仕舞ひます、假令客人が御茶や煙草を請求しても「彼方に置きますから」と言ッて決して、病室で飲み食ひをしないやうにするのが肝腎で有ります。

ソレから病人の糞便の取扱ひを嚴重にしなければならん、便器を扱ひたるときは、能く手を洗ッて消毒するのは勿論、凡て病人の事に手を附けたら一々消毒しなければなりません。デ手を洗ふ消毒薬は昇汞水、石炭酸水が宜い、併しながら往々見受けますに大便の上に昇汞水を撒布て居らるゝ方が有ります。大便は石炭酸水を撒くのは宜いが、昇汞水は十分の效が無い。何故なれば昇汞水と云ふ

ものは大便に灌けば其上部を固め又た糞便に逢ふて性質を變化するものであるから內部にまで恐く浸み透ッて、効力を逞ふする働きかない肺結核患者の痰などに昇汞水を用へたるか如く表面は凝固して其內部に在る黴菌は依然と生活をして居る恰も昇汞水と云ふ風呂敷を被ぶせたやうなもので若しも之を二ッに分割すると中から病毒が出ます甚だ効能が少いです警察の方では此山根君の注意かして糞便上には昇汞水は可けないからと云ふて生石灰并に石炭酸水のみを撒布せます。石炭酸は價値が高くて貧民が澤山に用ひるには些と困難ですが代りに効かある昇汞水は價は廉であるが大便の消毒には効驗が無いから無駄になる併し手や器物でも洗ふあれは有力の良藥です。石炭酸水の代を糞便に要する場合には良き生石灰で消毒しなければならぬ、同じ石灰でも世間「漆喰」と云ふ既に風化したる粉石灰にては往けぬ、生石灰と云ッて硬き塊で水を入れるとバチ〳〵沸騰して手を入れると燒傷する位のもの、あれが宜ろしい。溶し方は生石灰一升に清水一斗を入れた位が宜い、(便所に撒くにはいま少し濃い方若くは其碎粉が宜い)此生石灰の溶かしたのは乳に似て居るゆへ之を石灰乳と謂ひます。之を汲み取つて患者の通利一度毎に糞便を(便器中に)消毒し又た糞池幷に其周圍にも充分撒かなければなりませぬ。便器に生石灰の碎潰した粉を布いて、其上に便を取ッて始くすると皆消毒せられまして健康者の便と同しに爲ります。若し不幸にして病人のあッたときは消毒藥の使用法、大便の取締及豫防法一切の事を能く醫士に聞て之を嚴重にしなくてはなりませ

ぬ。是れ一家一身の爲めのみならず實に國家の爲めです。ソレから石灰を糞池內にのみでなく周圍にも能く撒かないでは何の役にも立たない、黴菌學者の說に承るに此糞池の中と云ふものは、生存競爭で、種々の黴菌が互に生活を爭ふて居るので、虎列剌赤痢の黴菌などは直ぐには死なゝいが、長い間には他の强い黴菌の爲めに漸々食ひ殺されて、凡そ三週間も經れば遂に消滅すと云ふ故に患者の使ッた便所には暫らく行かぬ方安全なり消毒後二三週間を經れば十分なり併しながら安心をしてソー幾日も打捨て置くことは出來ませぬから消毒藥を撒くのは必要であります別して藥を灌くのみならず能く掃除して淸潔にすることを充分に御注意なさらなければならぬ、而して石炭酸水及昇汞水の溶し量を充分にするを必要とす即ち甲は二十倍乙は千倍なるべし

ソレから又御交際の廣い御家では、日々便所の淸潔と消毒方法とを務むべく親戚知己の人が來まして、便所に入りましたなら其時々能く注意し或は少しも疑ありて怪しき樣なれば何に關せず消毒を直ちにすることが肝要です、但し無益の場所に矢鱈に消毒藥を濫費なさるのは餘り經濟上褒めたことでもない此等は巧者の人に御尋問遊ばせ假令其人は健康のつもりであッても、先刻此事を注意せん爲めに例として話した小千田の停車場前の家の如く、病毒を置かれたのも知らないで居ッて、而も本人は癒ッて、反ッて病毒を殘された家の方で重い病氣を起すやうなことがあッては甚だ危險故、傳染病の大に流行する地方にては、他より來たる人か上圊することか有ッたら、直ぐに消毒藥

を撒くのは無益にはならぬ、小午田楮根の例などに能く御鑑み下すッて御注意の程を希望致します。寄席芝居等の便所は夫れ故に日々十分の消毒を爲すの規則でありますが殊に井戸か便所の近傍にでもあると誠に危險であります、井戸には傍から汚水が來ないやうに見えますが、なかなか爾うでありませぬ。水道不完全の井戸などは勿論汚水が混入し易い堀穿井戸は割合に少ないが、ソレでも逆水がするやう杯事があると糞池から浸み出てたる汚物が流れて今入ぬとも限られぬ又極く遠方に在あッた病毒は何うして井戸の中に來るかと云ふに土地の層中は、大なる流れが有るから、病毒を川に流したと一般で糞池から地中に浸み込んだものをさし水の流に傳へて井戸に流し込むのであります、殊に中水と稱する淺い堀井戸は自然種々の物が這入り易いから餘程危險であります、水性の知れない井戸で食物は勿論、手を洗ひ口漱ぐと云ふやうな事は急度爲さらぬ樣御注意相成らねば往けませぬ。

デ、一身一家豫防注意は段々申述べた通り、括くッて言へば常に清潔法を貴び藥劑又は日光等の力に依りて消毒法を能く行ひ飲食物を注意し、攝生法を守りて寢冷夜更かし等をせず種々腸胃病を起し易き原因を避くるとの如き概して言へば衣食住幷に身体の起臥等に綿密に意を注ぐ可き事の他之無し併し尤も必要は病者に隔離して可成近接しない事です是には病院か必要です然るに俗間では傳染病者かあると隱したかる隱す故に豫防か十分しない從て他に傳染する家内を盡く病人は爲ッたなどの例かあります愼むべき事です決して隱す樣

の心得では國家に對して濟みませぬ夫れ故隱すものは罪を受けます。

又た往々傳染病は下等社會の病の樣に思召す人かありますが是れは大なる間違ひです人は人で上下共身体に變りはありませぬ此点にも能く御考へを願ひたいです。

未た種々詳細に御話し致すべきだか山根君か代りに十分結構なる演説をして吳る筈ですから私が下手の長談議なる諺通りつまらぬとを長の話しては御退屈でしようから何れ此後に申上るとして此にて御免を願ひ升。

大日本婦人衛生會記事

○十一月例會　前會は神田區に於て開會せしを以て順序として當月は日本橋區に於て開會すべきことに決し去六日第一土曜日午后一時より日本橋區箔屋町公立城東小學校樓上に於て開會せり此日や折惡しく朝來の雨天にて終日止まざりしを以て會員は比較的少かりしが近傍の各女學校教員生徒傍聽の爲め續々來會し出席員凡三四百名に達せり最初に醫學士田代義德君には創傷に就て演説せられ次に醫學士岩井禎造君の演説あり又山根醫學士等も來會せられ散會せしは四時頃なりしが神田區に次きてその盛會なりき尙次回は京橋區に於て開會の都合ありとす

◉入會者

●森川かめ子の紹介に依り

日本橋區濱町三丁目六番地　磯田かつ子

◎大澤とよ子の紹介に依り

神奈川縣久良郡石川中村千四百九十一番地　本嶋かね子

◎井澤ろく子の紹介に依り

芝區三田豊岡町二十三番地　柳川しげ子

◎早川春子の紹介に依り

清國上海楊子路正金銀行出張所内　西巻都兒子

◎會長仁禮すが子の紹介に依り

本郷區三組町八十一番地　太田奈美子

神保ひさ子

◎事務所へ申込に依り

本郷區金助町四十四秋間方　河邊勇子

◎粟田禰子の紹介に依り

群馬縣碓水郡安中町大字中宿第四番地　田中たか子

◎青木すゞ子の紹介に依り

下谷區御徒町一丁目六十九番地　宮本いく子

本所若宮町二百十番地粟原高十郎方　橋本よし子

◎野口きつ子の紹介に依り

本郷區第一醫院　伊藤みち子

◎津田たま子の紹介に依り

芝區白金台町一丁目四十五番地　大舘まち子

大舘ふみ子

本所區緑町壹丁目十八番地　津田かめ子

◎事務所へ申込に依り

新潟縣西蒲原郡石瀬村大字石瀬百四拾一番戸　本間あか子

大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衞生會規則

第一條 凡本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持するの方法を講究し衞生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり

第二條 本會は私立大日本婦人衞生會と稱し之を東京に置く

第三條 本會の會員たらんと欲する者は身分の尊卑を問はず何人にても入會することを得

第四條 會員たらんと欲する者は族籍住所姓名を記し本會事務所へ申込ある可し

但事務所は下谷區練塀町四十三番地に置く

第五條 本會々員を分て修身會員特別會員通常會員の三類とし共に會費金を納むる者とす

但終身會員は一時に金拾圓以上を納め特別會員は一年金二圓四拾錢以上を納め通常會員は同金壹圓二拾錢を納むる者とす尤も會員中書生及其他事故ある者は唯雜誌料として同六拾錢を納めしむ

第六條 男子にして本會の主義を替成する者は之を贊成員とす尤も會費は本會員に同し

但本會に功勞ある者は役員の協議を以て終身贊成會員(無會費)とすると有る可し

第七條 本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉す推戴員は皇族の御息所等に之を申請するものとす

第八條 本會は左の役員を置く

會長一名 副會長一名 幹事七名 評議員二十名 書記若干名

第九條 會長副會長及幹事評議員は會員の投票を以て之を撰舉し書記は幹事の推撰により會長之を命ず

但書記は都合により會員外の婦人又は男子に托することあるべし

第十條 會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し又は其代理をなし幹事は會長の命を受けて會務を處理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命に從て諸記録及雜務を掌る

但幹事の分課を設けて第一 會計 第二 編輯出版 第三 庶務とす

第十一條 會長の見込を以て右役員外に會員中より臨時に指名委員を置くことあるべし

第十二條 會長副會長及幹事評議員の任期は一年とす尤再撰するも妨なし

第十三條 會長副會長及幹事評議員は無給料とし書記は相當の報酬を給す

第十四條 本會の集會は七月八月を除くの外每月一回として通常第一土曜日午後一時より之を開く

第十五條 每會學識經驗ある者を聘し講義演說を囑し本會々員の演說と共に之を筆記して本會雜誌に掲載し每月各一冊つゝ無代價にて之を會員に頒付するものとす

但し演說の間に談話を交ゆる事あるべし

第十六條 會員は家族の婦女子又は知己の婦人を本會々場に誘致して傍聽せしむることを得

第十七條 講義演說の際男子の傍聽を禁ず

但し會員に緣故ある男子は此限にあらず

第十八條 本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

明治二十一年二月二十八日內務省許可

但些少の金額は日々の費用支出の爲め事務所に引出置を得

第十九條　會計の收支は總て會計課幹事の檢印を要す

第二十條　會員又は會員外より金圓若くは書籍物品等を寄贈あるときは本會より謝狀を送り且寄贈の品目及其人の姓名を本會雜誌に載せ報告するものとす

第廿一條　會費は郵便小爲替にて東京下谷郵便局へ向け振出しある可し

但不得止場合には郵便劵を代用するも妨けなし尤も一割增とす

第廿二條　入會員には會員證を附與すべきに付郵便にて申込の者は郵便劵二錢を添ふべし

第廿三條　每年三月九月の總會に於て會計の收支庶務の概略幷に會員の增減等を報告す可し且規則改正の案あれば之を議定するものとす尤も議定は總て多數決とし可否半數なるときは會長之を決す

但至急規則の改正を要する事あるときは豫め會員に報して臨時に之を爲すことを得

第廿四條　三月の總會に於て役員の撰擧をなすものとす

第廿五條　規則の範圍內に於て役員の評議を以て細則を設くることを得

第廿六條　各地方にて發起者十人以上ある者は支會を設くることを得

但其規則は本會の規則に抵觸せざる樣起草し本會役員の認可を經へし

第廿七條　本會の集會場は時々報知する者とす

第廿八條　會費金は受領證を付與すべし尤も小爲替又は郵便劵にて納むる者は右受領證遞送費として郵劵二錢を添ふべし然らされは受領證は送付せざるものとす

東京下谷區練塀町四十三番地

私立　大日本婦人衛生會

明治三十年十一月十八日印刷
明治三十年十一月二十日發行

發行所　東京下谷區練塀町四十三番地　大日本私立婦人衛生會
編輯兼發行者　東京牛込區矢來町三番地　田中徳三郎
印刷者　同　神田區小柳町十三番地　小高良造
印刷所　同　神田旅籠町貳丁目拾一番地　廣業館

明治廿六年四月四日遞信省認可每月二十日發行

（定價金拾錢）